

ロッシーニ《ブルグントのアデライデ》作品解説 水谷 彰良

初出は日本ロッシーニ協会ホームページ掲載の作品解説を増補改訂した紀要『ロッシーニアーナ』第36号(2016年2月発行)掲載の拙稿「ロッシーニ全作品事典(32)ブルグントのアデライデ」。書式を変更し、図版を加えて日本ロッシーニ協会ホームページに掲載します。(2016年4月)

I-23 ブルグントのアデライデ *Adelaide di Borgogna*

劇区分 2幕のドラマ・ペル・ムジカ (dramma per musica in due atti)

第1幕：全17景 [註]、第2幕：全18景、イタリア語 註：ROF上演台本では15景。

台本 ジョヴァンニ・シュミット (Giovanni Schmidt,1775頃-1839以降) 註：初版台本に記載なし。

原作 不明

作曲年 1817年11～12月

初演 1817年12月27日(土曜日)、ローマ、アルジェンティーナ劇場(初版台本の表記はTeatro a Torre Argentina)

人物 ①オットーネ Ottone (コントラルト) ……ドイツ皇帝

註：史実のオットー1世 (Otto I,912-973.東フランク王国国王 [在位 936-962.]、神聖ローマ帝国初代皇帝 [在位 962-973.])

②アデライデ Adelaide (ソプラノ) ……イタリア王ロタリオの未亡人

註：史実のアデライデ (Adelaide del Sacro Romano Impero,931-999)。ブルグント国王ロドルフ2世 (Rodolphe II de Bourgogne [Rodolfo II di Borgogna(伊)],?-937) の娘。

③ベレンガリオ Berengario (バス) ……アデルベルトの父

註：史実のベレンガリオ2世 (Berengario II di Ivrea,900頃-966)。

④アデルベルト Adelberto (テノール) ……ベレンガリオの息子

註：史実のアデルベルト2世 (Adalberto II d'Ivrea,931-975)。

⑤エウリーチェ Eurice (ソプラノ) ……ベレンガリオの妻

⑥イロルド Iroldo (ソプラノ) ……カノッソの総督 註：再演では基本的にテノールの役。

⑦エルネスト Ernesto (テノール) ……オットーネ軍の将校

他に、ベレンガリオの兵士、オットーネの戦士、侍女たち、民衆(合唱)

初演者 ①エリザベッタ・ピノッティ (Elisabetta Pinotti,1785c-?)

②エリザベッタ・マンフレディーニ (Elisabetta Manfredini,1790-?)

③アントーニオ・アンブロジー (Antonio Ambrosi,1786-?)

註：初版台本記載のジョアッキノ・シヤルペッレッティ (Giacchino Sciarpettetti,?-?) から変更。

④サヴィーノ・モネッリ (Savino Monelli,1784-1836)

⑤アンナ・マリーア・ムラトーリ (Anna Maria Muratori,?-?)

⑥ルイーザ・ボッテージ (Luisa Bottesi,?-?)

⑦ジョヴァンニ・プリエスキ (Giovanni Puglieschi,?-?)

管弦楽 [註：自筆楽譜消失のため確定せず。以下は暫定的に Rescigno に準拠] 1 ピッコロ、1 フルート、2 オーボエ、2 クラリネット、2 ファゴット、2 ホルン、2 トランペット、1 トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、シンバル、弦楽5部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器

演奏時間 序曲：約6分、第1幕：約68分、第2幕：約52分

自筆楽譜 消失または未発見

初版楽譜 Tito di Gio. Ricordi,Milano,1858. (ピアノ伴奏譜)

全集版 未成立 (第一次校訂譜のみ成立)

構成 註：全集版未成立のため、2011年ロッシーニ・オペラ・フェスティバルのプログラムに準拠。

序曲 (Sinfonia)：ホ長調、4/4拍子、アンダンテ・マエストーゾ～2/4拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ¹

註：《結婚手形》序曲の改作転用(楽器編成も変更)。

【第1幕】

- N.1 導入曲〈虐げられた哀れな祖国 *Misera patria oppressa*〉(アデライデ、アデルベルト、イロルド、ベレンガリオ、合唱)
— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈我らのイタリアは *Nostra è l'Italia*〉(エウリーチェ、ベレンガリオ、アデルベルト)
- N.2 合唱〈イタリア万歳、かつて支配者にして *Salve Italia un dì regnante*〉、シェーナ〈ああ、美德において聖なる *Oh sacra alla virtù*〉とオットーネのカヴァティーナ〈自分の不幸に耐えなさい *Soffri la tua sventura*〉(オットーネ、合唱)
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈陛下、陣地に到着しました *Signor, al campo è giunto*〉(アデルベルト、エルネスト、オットーネ)
- N.3 オットーネとアデルベルトの二重唱〈アデライデは涙のうちに生きている *Vive Adelaide in pianto*〉(オットーネ、アデルベルト)
— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈オットーネは罨にかかった *Cadde nel laccio Ottone*〉(エウリーチェ、ベレンガリオ)
- N.4 合唱とイロルドのカヴァティーナ〈偉大にして強者オットーネ万歳 *Viva Ottone, il grande, il forte*〉(イロルド、合唱)
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈陛下、お判りで? *Vedi, signor?*〉(アデライデ、オットーネ、ベレンガリオ)
— 合唱とイロルドのカヴァティーナの繰り返し〈世界はこの良き日に称えよ *Plauda il mondo in sì bel giorno*〉(イロルド、合唱)
— 合唱とイロルドのカヴァティーナの繰り返しの後のレチタティーヴォ〈黙っている! 絶えず黙っているなんて! *Tacer! Sempre tacer!*〉(アデルベルト、ベレンガリオ)
- N.5 ベレンガリオのアリア〈もしも好意的な運命が守ってくれるなら *Se protegge amica sorte*〉(ベレンガリオ)
- N.6 アデライデのカヴァティーナの前の合唱〈ああ、隠居所よ *O ritiro, che soggiorno*〉と、アデライデのカヴァティーナ〈ひどく泣いているわが眼よ *Occhi miei, piangeste assai*〉(アデライデ、合唱)
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈私にも許されます *Pur mi lice una volta*〉(アデライデ、オットーネ、イロルド)
- N.7 アデライデとオットーネの二重唱〈あなたは王冠と人生を私に与え *Mi dai corona e vita*〉(アデライデ、オットーネ)
- N.8 第1幕フィナーレ〈神殿の扉よ、開け *Schiudi le porte, o tempio*〉(アデライデ、オットーネ、エルネスト、アデルベルト、イロルド、ベレンガリオ、合唱)

【第2幕】

- N.9 導入曲〈襲いかかる鷲のように *Come l'aquila che piomba*〉(合唱)
— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈勝利しました、母上 *Vincemmo, o madre*〉(アデライデ、エウリーチェ、アデルベルト)
- N.10 アデライデとアデルベルトの二重唱〈お前の祖国の祈りに *Della tua patria ai voti*〉(アデライデ、アデルベルト)
— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈泣いているあなたを見て *Vederti in pianto*〉(エウリーチェ、アデルベルト、イロルド)
- N.11 エウリーチェのアリア〈ええ、ええ、私を殺してください *Sì, sì, mi svena*〉(エウリーチェ)
— アリアの後のレチタティーヴォ〈お待ちください…聞いてくれないのですか…*Fermati...non m'ascolta...*〉(アデルベルト) 註: 台本にあるが、ロッシーニは作曲していない。
- N.12 シーナ〈ベレンガリオは危機に瀕している *Berengario è nel periglio*〉とアデルベルトのアリア〈叫びをあげよ、ああ造物主よ *Grida, o natura*〉(アデルベルト、合唱)
— アリアの後のレチタティーヴォ〈来て。私の敵に私から話します *Vieni: alla mia nemica io stessa parlerò*〉(アデライデ、エウリーチェ、オットーネ、アデルベルト、イロルド、エルネスト、ベレンガリオ)
- N.13 四重唱〈アデライデ! ああ天よ、私はなにを目にしているのだ! *Adelaide! Oh ciel, che vedo!*〉(アデライデ、オットーネ、アデルベルト、ベレンガリオ)
— 四重唱の後のレチタティーヴォ〈仲間たち、信頼しよう *Compagni, a voi fidata*〉(アデライデ、オットーネ、エルネスト)

N.14 シェーナ〈ああ、お行きください…さようなら…Ah! vane…Addio…〉とアデライデのアリア〈純白のヴェールを巻き Cingi la benda candida〉(アデライデ、オットーネ、合唱)

N.15 合唱〈乙女たちは花冠を編み Serti intrecciare le vergini〉、シェーナ〈私に捧げられたこれは Questi, che a me presenta〉とオットーネのアリア〈おいで。あなたの花婿にして恋人は Vieni: tuo sposo e amante〉(アデライデ、オットーネ、アデルベルト、ベレンガリオ、合唱)

物語 (時と場所: 950-1年のカノッソの城塞の内と外)

註: 台本は史実と異なる「947年のガルダ湖近くのカノッソ (Canosso)」に時と場を設定。現実に存在する地名はレッジョ・エミーリアのカノッサ (Canossa)。

前段の物語 (史実に基づく劇の背景):

950年、イタリア王ロタリーオの死 [註1] により未亡人となったアデライデ (ブルグント国王ルドルフ2世 [註2] の娘) はパヴィアに逃れたが、ベレンガリオは自分の息子アデルベルト (オペラではアデルベルト) をアデライデと結婚させるべくパヴィアを包囲し、捕虜にしたアデライデをコモ湖に臨む城に幽閉した。4ヵ月後 (951年)、脱出に成功したアデライデはレッジョに逃れ、アットーネ (オペラではイロルド) の助けでカノッサ (オペラではガルダ湖に臨むカノッソ) の要塞に籠城した。東フランク国王オットー1世 (オペラではオットーネ) はアデライデのイタリア王妃の権利を擁護し、彼女を救出すべく軍を率いてアルプスを越えるが、カノッサの城塞はすでにベレンガリオ軍により占領されていた……

註1: ベレンガリオによって毒殺されたともいわれる。

註2: ブルグント王国は411年、ローヌ川の流域にブルグント族によって建国。534年にフランク王国によって滅ぼされ、933年にルドルフ2世 (Rudolphe II [Rodolfo II di Borgogna(伊),?-937]) が即位して新たなブルグント王国が成立したが、次王コンラート3世 (Conrad III,925c.-993) を経てルドルフ3世 (Rudolphe III,932c.-1032) の死をもって王家が断絶し、形骸化した。

【第1幕】

ベレンガリオの軍勢に占領されたカノッソの城塞。ベレンガリオの兵士たちが勝利を称え、征服された民衆は祖国とアデライデの運命を嘆く。ベレンガリオの息子アデルベルトはアデライデに結婚を迫り、拒否される (N.1 導入曲)。皇帝オットーネの軍勢がガルダ湖の近くに迫っているとの報せに、ベレンガリオは戦いでは勝ち目がないと考え、偽りの和平提案をすることにする。

オットーネの兵士たちがイタリアに敬意を表し、オットーネはアデライデ救出を誓う (N.2 合唱、シェーナ、オットーネのカヴァティーナ)。そこにベレンガリオの使者としてアデルベルトが現れ、和平を申し出る。アデライデとの面会を求めるオットーネに対し、アデルベルトは彼女を信用すべきでない中傷するが、オットーネをカノッソの城塞に迎えることにする (N.3 オットーネとアデルベルトの二重唱)。

カノッソの城塞の広間。オットーネはイロルドと兵士たちの歓迎の合唱で迎えられ (N.4 合唱とイロルドのカヴァティーナ)、ベレンガリオも偽りの恭順の意を示す。アデライデから夫が殺され王国を奪われた経緯を聞いたオットーネは彼女に魅せられ、アデライデを救って妻に迎えることにする。一方、アデライデを愛するアデルベルトは、父ベレンガリオを非難する。ベレンガリオは、時が来たらオットーネを倒して復讐を果たすと誓う (N.5 ベレンガリオのアリア)。

アデライデの部屋。貴婦人たちに囲まれたアデライデは、涙を流す日は終わり幸せが訪れると確信し、オットーネへの愛を歌う (N.6 合唱とアデライデのカヴァティーナ)。そこに現れたオットーネはアデライデに結婚を申し込み、アデライデもオットーネへの愛情を告白、二人は永遠の愛を誓う (N.7 アデライデとオットーネの二重唱)。

カノッソの広場。人々に結婚を祝福されたオットーネとアデライデが神殿に向かう。そこに武装したベレンガリオとアデルベルトが乱入し、彼らの兵士たちと共に攻撃をしかける。アデライデはベレンガリオの兵士たちに捕らえられ、オットーネと部下たちは敵に圧倒されてしまう (N.8 第1幕フィナーレ)。

【第2幕】

カノッソの城塞。勝利を収めたベレンガリオの兵士たちが、逃亡したオットーネを嘲笑する (N.9 導入曲)。アデルベルトは自分と結婚して王国を取り戻すようアデライデにもちかけ、拒否される。そこに兵士たちが駆け込み、オットーネの反撃でベレンガリオが敗北して捕虜になったと告げ、アデライデとアデルベルトの立場が逆転する (N.10 アデライデとアデルベルトの二重唱)。ベレンガリオの妻エウリーチェは、息子アデルベルトに捕虜になった夫とアデライデの交換を求める (N.11 エウリーチェのアリア)、兵士たちも王の救出を促すが、アデライデへの愛を断ち切れぬアデルベルトはなかなかその決心がつかない (N.12 シェーナとアデルベルトのアリア)。

ガルダ湖に臨むオットーネの陣営。オットーネの部下エルネストがアデルベルトの到着を告げる。アデルベルトは父とアデライデの交換に同意するが、ベレンガリオはこれに反対してアデライデと引き換えにインスブリアの領土を要求する。そこに、エウリーチェによって解放されたアデライデが現れるので、3人は驚く。アデライデはエウリーチェとの約束でベレンガリオたちをカノッソに帰そうとするが、ベレンガリオとアデルベルトは再び兵を率いて戦う決意をしており、オットーネも彼らとの戦いで決着をつけようとする (N.13 四重唱)。

オットーネの陣営の壮麗な天幕。オットーネはベレンガリオの軍勢との最後の決戦をすべく、兵士たちを鼓舞する。アデライデはオットーネに自分のヴェールを巻き、その出陣を見送る。ほどなくオットーネ軍の勝利の叫びが聞こえ、アデライデの不安が歓喜に変わる (N.14 シェーナとアデライデのアリア)。カノッソの城塞の外。人々が勝利の喜びに酔い、凱旋したオットーネを迎える。オットーネは人々に感謝し、アデライデに王国を返還するとともに皇妃として迎えると告げ、二人で人々の祝福を受ける (N.15 合唱、シェーナとオットーネのアリア)。

解説

【作品の成立】

《ブルグントのアデライデ》は、前作《アルミーダ》(1817年11月9日ナポリのサン・カルロ劇場初演)に続いて短期間に作曲されたオペラ・セーリアである。ローマのための新作は《トルヴァルドとドルリスカ》(1815年12月26日、ヴァッレ劇場初演)を皮切りに、《セビーリャの理髪師》(1816年2月20日、アルジェンティーナ劇場初演)、《ラ・チエネレントラ》(1817年1月25日、ヴァッレ劇場初演)と年1作のペースで書かれていた。アルジェンティーナ劇場の興行師ピエトロ・カルトーニ (Pietro Cartoni, 1776-1848) が次の謝肉祭のための新作を求めたのは1817年10月初めで、ロッシーニは10月26日に署名した契約書の写しをカルトーニに返送している (契約書は現存せず) ²。

《アルミーダ》の作曲に忙殺されたロッシーニはローマのための新作をナポリで作曲することにし、その台本を《アルミーダ》の台本作家ジョヴァンニ・シュミット (Giovanni Schmidt, 1775頃-1839以降) に依頼した。ロッシーニのナポリ・デビュー作《イングランド女王エリザベッタ》(1815年)も手がけたシュミットは1775年頃リヴォルノで生まれ、生涯に48のオペラ台本を書いたサン・カルロ劇場の専属詩人で、ナポリで上演されたスポンティーニ《ヴェスタの巫女》《フェルナンド・コルテス》のイタリア語台本も作成していた。《ブルグントのアデライデ》は創作ではなく、原作に当たる文献 (同じ題材による他者の作品ではなく史実に関する文献) が存在したと思われるが、現時点で特定されていない。

ロッシーニは11月9日に《アルミーダ》を初演した後もナポリに留まって《ブルグントのアデライデ》の作曲を始め、12月半ばにローマ入りした (12月5日付の「両シチーリア王国新聞」にロッシーニがナポリを離れると書かれているが、13日まではナポリにいたものと思われる) ³。その後の経過は不明で、ロッシーニはローマから母に宛てた手紙の一つ (同月19日以前) に「ここで一つオペラを書き、すぐにナポリに発ちます」と記し、19日付の手紙に「ぼくのオペラはうまくいくでしょう。[初演の] 最初の三晩の後、すぐにオラトリオ [[エジプトのモゼ]] のためナポリに戻ります。バルバーイアはぼくが来年中に二つオペラを書くよう望んでいますが、ぼくはそう思いません」と書いている⁴。

初演は12月27日と定められ、ローマでの2週間に満たぬ期間は事前に作曲した音楽を歌手とオーケストラに合わせる調整や改訂に費やされたと思われるが (ベレンガリオ役は当初予定したジョアッキノ・シャルペッレッティからアントーニオ・アンブロージに変更)、自筆楽譜消失のため詳細不明で、初日を迎えるまでのドキュメントも残されていない。

《ブルグントのアデライデ》初版台本

ADELAIDE
DI BORGOGNA
DRAMMA PER MUSICA
DA RAPPRESENTARSI
NEL NOBIL TEATRO
A TORRE ARGENTINA
Il Corsicale dell' Anno 1818.



IN ROMA MDCCCXVIII.
Nella Stamperia di Crispino Puccinelli
presso a S. Andrea della Valle.
Con permesso de' Superiori.

【特色】

ロッシーニはこの作品をナポリの改革的オペラ・セーリアの延長ではなく、音楽や構成面で初期の成功作《タンクレーディ》の枠内にとどめようとした。これはローマの聴衆の保守的な趣味や歌手の能力を考慮した選択でもあり、旋律を導き出すヒントに《タンクレーディ》とその前後の作品の音楽素材が使われ (そのままではなく、着想の糸口としての借用)、序曲 (Sinfonia) に旧作《結婚手形》(1810年、学生時代に作曲したシンフォニーアの転用でもある) を改作転用している。

優れたナンバーも少なからずある。混声合唱で始まる導入曲〈虐げられた哀れな祖国 (Misera patria oppressa)〉(N.1) は、4人の主要人物のうち3人 (ベレンガリオ、アデライデ、アデルベルト) を登場させて対立関係を明確にするとともに、アデライデの毅然とした態度を通して劇の発端に観客を引き入れる (但し音楽は旧弊で、アデライデの悲壮感にやや欠ける)。オットーネ登場のカヴァティーナ〈自分の不幸に耐えなさい (Soffri la tua sventura)〉(N.2) は印象的なコロノ・イングレーゼのオブリガートを持ち、カバレッタも華麗な技巧を駆使して歌われる。続くオットーネとアデルベルトの二重唱〈アデライデは涙のうちに生きている (Vive Adelaide in pianto)〉(N.3) には、苛立ちを隠

す両者のやりとりが巧みに表現されている。

イロルドのソロを伴う合唱〈偉大にして強者オットーネ万歳 (*Viva Ottone, il grande, il forte*)〉(N.4) も、短いながらエキゾチックな音楽である。柔らかな旋律と伴奏による女声合唱〈ああ、隠居所よ (*O ritiro, che soggiorno*)〉も秀逸で、続くアデライデのカヴァティーナ〈ひどく泣いているわが眼よ (*Occhi miei, piangeste assai*)〉(N.6) の後半部「ああ、愛しい人の面影 (*O cara immagine*)」はホルン重奏を伴い、愛する人への思いが叙情的に歌われる。アデライデとオットーネの二重唱〈あなたは王冠と人生を私に与え (*Mi dai corona e vita*)〉(N.7) は愛のデュオで、カバレッタに両者の心の合一が華やかに歌われる(音楽は《泥棒かささぎ》第2幕ピッポとニネッタの二重唱を想起させる)。第1幕フィナーレ〈神殿の扉よ、開け (*Schiudi le porte, o tempio*)〉(N.8) は、冒頭合唱、カノンを含む四重唱、経過部とストレッチの三つの部分からなる。

第2幕の楽曲はアデルベルトの合唱付きアリア〈叫びをあげよ、ああ造物主よ (*Grida, o natura*)〉(N.12) が優れ、次の四重唱〈アデライデ! ああ天よ、私はなにを目にしているのだ! (*Adelaide! Oh ciel, che vedo!*)〉(N.13) では、アデライデ、オットーネ、アデルベルト、ベレンガリオの驚きや戸惑いがアジリタのパッセージを交えて歌われる。だが、突出して素晴らしいのがアデライデの超絶技巧アリア〈純白のヴェールを巻き (*Cingi la benda candida*)〉(N.14) である。これはカンタータ《テーティとペレーオの結婚》チャーレレのアリア(N.9〈ああ、彼女たちは逆らうことができない (*Ah non potrian resistere*)〉)の転用で、素材は《セビーリヤの理髪師》伯爵のアリア〈もう逆らうのをやめろ〉に遡る。

続く第2幕フィナーレ(N.15)は、独立した混声合唱〈乙女たちは花冠を編み (*Serti intrecciar le vergini*)〉、オットーネの短いレチタティーヴォ(シェーナ)とアリア〈おいで。あなたの花婿にして恋人は (*Vieni: tuo sposo e amante*)〉からなる。この点でタイトルロールの大アリアで締め括る他のハッピーエンドのオペラとはコンセプトが異なり、タンクレーディやチーロのような男装女性コントラルトを主演とするオペラ・セーリアの系譜に連なる作品として、ロッシーニが台本作家に構成を指示した結果と思われる。なぜなら、ロッシーニはナポリでシュミットに書かせた台本の許可をあらかじめローマの検閲から得ていたに違いなく、現地入りしてからの作劇上の変更は不可能だからである(それゆえ、本作の構成はロッシーニの意図に基づくと判断しうる)。

しかしながら、ナポリで展開した力強くドラマティックな作風に比して《ブルグントのアデライデ》が旧弊なオペラ・セーリアであるのは明白で、題材が中世騎士の物語であることも関係するようだ。不詳の協力者——ミケーレ・カラファ(Michele Carafa, 1787-1872)の可能性もあるが確証を欠く——に作曲を委ねたのは、ベレンガリオのアリア〈もしも好意的な運命が守ってくれるなら (*Se protegge amica sorte*)〉(N.5) とレチタティーヴォ・セッコで、印刷台本にある脇役のアリアは作曲されず、後の再演では必要に応じてこれを第三者が作曲・挿入している(N.11 エウリーチェのアリア〈ええ、ええ、私を殺してください (*Sì, sì, mi svena*)〉がこれに当たる)。

初演歌手は超一流ではないものの優れたメンバーが含まれ、アデライデ役のエリザベッタ・マンフレディーニ(Elisabetta Manfredini, 1790?)はこれに先立つロッシーニ作品の初演歌手を務め、《バビロニアのチーロ》アミーラ、《タンクレーディ》アメナイーデ、《シジスモンド》アルディミーラを創唱している。ベレンガリオ役のアントーニオ・アンブロージ(Antonio Ambrosi, 1786?)は《泥棒かささぎ》代官ゴットルドの創唱歌手で、後に《マティルデ・ディ・シャブラン》ジナルドと《ゼルミーラ》ポリドーロを創唱する。オットーネ役のエリザベッタ・ピノッティ(Elisabetta Pinotti, 1785c?)も、これに先立ちタンクレーディをトリノとフィレンツェ、チーロをリヴォルノで演じている。



全曲のチェンバロ独奏用編曲の表紙

(ヴィーン、1823-26年。ロッシーニ財団所蔵)



エリザベッタ・マンフレディーニ

【上演史】

慌しいスケジュールで完成された《ブルグントのアデライデ》の初演は、1817年12月27日、アルジェンティーナ劇場で行われた(ジョヴァンニ・モンティチーニ[Giovanni Monticini]がロッシーニ他の音楽で振付・構成したバレエ《チーロとトーミリ[Ciro e Tomiri]》を併演³⁾)。初日が失敗したことは、12月31日付『ヌオーヴォ・オッセルヴァトーレ・ヴェネト(*Nuovo Osservatore Veneto*)』に、「同じ一夜に(《ブルグントのアデライデ》)生き、死ぬのが見られた。このロッシーニのオリジナル作品は、小太鼓、大太鼓、さまざまな行進曲があるにもかかわらず失敗した」と書かれたことでも明らかである。翌1818年1月9日付『ノティーツイエ・デル・ジョルノ(*Notizie del giorno*)』も、皮肉を込めてこう書く——「彼(ロッシーニ)の天才は目下、眠り込んでしまったかのようだ。劇の進むうちに時折、彼は幾つかの美しい新たな音楽で目を覚ますが、それは《アルジェのイタリア女》《ラ・チェネレントラ》等々

の作曲者であることを思い出させるだけである」⁶。

ロッシーニは初演 3 日後 (12 月 30 日付) の母宛ての手紙に、「今夜ナポリに向けて発ちます。ぼくのオペラはまああまの出来で、ぼくはそのことに満足しています」と記している⁷。そして後日このオペラの自筆楽譜を回収し、その楽曲を《エドゥアルドとクリスティーナ (*Eduardo e Cristina*)》(1819 年 4 月 24 日ヴェネツィアのサン・ベネデット劇場初演) 第 1 幕に再使用した。そこでは導入曲 (N.1)、合唱とオットーネのアリア (N.15)、合唱とアデライデのカヴァティーナ (N.6)、アデライデとオットーネの二重唱 (N.7)、合唱 (N.4) を用いて第 1 幕の N.1~N.5 とし、カンタータから転用したアデライデのアリア (N.14) は使われない。

その後《ブルグントのアデライデ》は 1820 年 4 月 3 日ヴェネツィアのヴェンドラミン・イン・サン・ルーカ劇場、同年春 (5 月以前) フィレンツェのペルゴラ劇場、11 月フォルリのコムナーレ劇場、1822 年 6 月パドヴァのヌオーヴォ劇場、9 月 8 日ルーゴのコムナーレ劇場⁸、10 月 25 日リスボンのサン・カルロス劇場で再演され、1825 年 6 月リヴォルノのカルロ・ロドヴィーコ劇場の上演を最後に忘れ去られた。

復活上演は 19 世紀最後の上演から 152 年後の 1978 年 11 月 19 日、ロンドンのクイーン・エリザベス・ホールにて演奏会形式で行われ、舞台蘇演は 1984 年 8 月 4 日マルティーナ・フランカのヴァッレ・ディトリア音楽祭 (アデライデ: マリエッラ・デヴィーア) でなされた。その後 1988 年パリ、1992 年リエージュ、2005 年エディンバラ (下記 CD 参照) でも上演されたが、ロッシーニ財団の第一次校訂譜 (ガブリエーレ・グラヴァーニャ/アルベルト・ゼッダ校訂) は 2006 年 8 月 18 日、ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルで初使用された (演奏会形式。指揮: リッカルド・フリツァ、オットーネ: ダニエラ・バルチェッローナ、アデライデ: パトリツィア・チョーフィ)⁹。舞台上演での使用は 2011 年 8 月の同フェスティヴァルが最初で (演出: ピエラッリ、指揮: ディミトリ・ユロフスキ。詳細は下記 DVD/BD 参照)、2014 年 7 月にはヴィルトバートのロッシーニ音楽祭でも上演されている (演出: アントーニオ・ペトリス、指揮: ルチアーノ・アコチェッラ)。



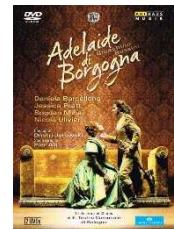
ROF プログラム、2006 年と 2011 年

推薦ディスク

・《ブルグントのアデライデ》(2005 年 8 月 19 日エディンバラ国際音楽祭上演) ジュリアーノ・カレッラ 指揮スコティッシュ室内管弦楽団、同合唱団 マジェラ・クラール (S/アデライデ)、ブルース・フォード (T/アデルベルト)、ジェニファー・ラーモア (Ms/オットーネ) ほか 録音: 2005 年 8 月エディンバラ(ライブ) Opera Rara ORC32 (CD2 枚組) 註: エウリーチェのアリア含まず。



・《ブルグントのアデライデ》(2011 年 8 月ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル上演) ピエラッリ演出 ディミトリ・ユロフスキ指揮ボローニャ市立劇場管弦楽団、同合唱団 ジェシカ・ブラット (S/アデライデ)、ダニエラ・バルチェッローナ (Ms/オットーネ)、ボグダン・ミハイ (T/アデルベルト) ほか 収録: 2011 年 8 月ペーザロ(ライブ) Arthaus Musik 108060 (BD)、101646 (DVD2 枚組) 日本語字幕付き



¹ 速度表示は Gabriele Gravagna, *La Mia Opera pare che andrà bene / Per una rilettura di Adelaide di Borgogna* (in programma del ROF "Adelaide di Borgogna" 2006 e 2011.)に基づく。

² Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, vol. I: 29 febbraio 1792-17 marzo 1822*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro, Fondazione Rossini, 1992., pp.230-231.

³ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., p.192. [書簡 IIIa.102], n.1.

⁴ Ibid., p.192. 及び 193. [書簡 IIIa.102 e 103]

⁵ Mario Rinaldi, *Due secoli di musica al Teatro Argentina., Firenze, Leo Olschki, Vol.1, 1978., pp.542-543.*

⁶ Ibid., p.194., n.2 の引用より。

⁷ Ibid., p.194. [書簡 IIIa.104]

⁸ 以上の上演日は、A cura di Marcello Conati, *Contributo per una cronologia delle rappresentazioni di opera di Gioachino Rossini avvenute in teatri italiani dal 1810 all'anno teatrale 1823.* (in *Atti dei convegni lincei 110, La recezione di Rossini ieri e oggi. Roma 18-20 febbraio 1993.*, Roma, Accademia nazionale dei lincei, 1994., pp.231-250) による。

⁹ N.11 エウリーチェのアリアは無く、第 2 幕は六つのナンバーで構成。